

黄昏どき

清水せき子

いつもは混んでる店内がひっそりとしている。どうやら客は私一人のようだ。今日は家人は留守で主婦休業。黄昏どきのコーヒータイムもいもんだな。

歌が流れている。シャンソンらしい。らしいというのは、シャンソンの何たるかをよくは知らないのだ。哀切を帯びた女性歌手の歌声が、意味も分からないのに胸を揺さぶる。一人もいいもんだ、とうそぶきながらもちよっぴり人恋しい。お店の若い女性に話しかけてみた。

「これ、シャンソンよね」

「さー、たぶんね」

「こんな音楽聴いてると切なくならない？」

「……そうですかー」

「そうかー、あなた若いもんね。私のような歳になるとね、こんな音楽聴くと古傷が痛むのよ。あなたにはまだ傷なんてないのよね」

「ありますよ！ でも傷ついたらすぐ蓋してしまうんです」

「そー、でも、蓋しても蓋しても噴き出す傷もあるのよ」

独りごとのようにつぶやく私に、皺一つない彼女は、窓の外に視線を移しながら「ふーん」と相槌を打ってくれた。

「今日のコーヒーおいしいね、いい香り！」

「はい、スペシャルブレンドです」

大して味が分かる訳でもない私にも深いコクが感じられる。

カウンターを見ると「本日のお勧め、スペシャルブレンド」と表示してある。ここはコーヒー専門店での日のお勧めを試飲させてくれる。

朝一番、挽きたての香りが好きで、毎週のように豆を買っている。コーヒー代もバカにならない。年金暮らしたというのに。——手ごろないつもの豆で充分よ——。主婦の私がささやいている。

「……いつもの……」いいかけてことばを呑んだ。傍らのスペシャルブレンドがやけに気になる。百グラムで二百円は高い。

「スペシャル」ねえ……。

大してドラマチックでなくとも長く生きてきたというだけで胸が痛む。この痛みこそコクじゃないの。……とすれば大切に時間を積み上げてきたコクの分かる私が飲まずに誰が飲むの。

「スペシャルブレンド、200下さい」

黄昏どきは主婦を惑わすらしい。